

防災教育・復興教育推進事業（いわての復興教育スクール）成果報告書

学校名：岩手県立釜石祥雲支援学校

I 取組の概要

1 はじめに

本校は小学部17名、中学部15名、高等部14名、しゃくなげ分教室9名の児童生徒が在籍しており、昨年度から釜石高校内に高等部が移設した。

また、今年度、「いわての復興教育スクール」県指定を受けたことを機会に、本校においても学校全体、各学部の重点目標に組み入れ、「いきる」「かかわる」「そなえる」の、3つの教育的価値を育てるとともに、復興・防災教育の充実を図る取り組みを推進している。

2 本校および地域の実態

学校周辺や地域の状況として、本校舎のある地区は釜石市から土砂災害指定区域に指定されており、これまで大雨時の通学路冠水、陥没、川の氾濫経験があり、常に注意を必要としてきた。また、本校は市内から離れた山間部にあり、校舎前の道路は迂回路のない一本道のため、災害が起きたり通学路が遮断されると逃げ場を失う。そのため、日頃から学校を取り巻く自然環境にも注意を払い、安全な学校生活を心がけている。

2 具体的な取り組み

(1) 防災避難訓練

地震、火災を想定した総合的な避難訓練を年3回実施している。隣接する釜石病院内で学習するしゃくなげ分教室の避難については、本校舎と離れているため、トランシーバーを使い情報をやり取りしながら避難している。また、高等部生徒は釜石高校の避難訓練に参加している。本校舎のある地域は、以前より釜石市から土砂災害警戒区域に指定されており、大雨時の避難などについてもマニュアル化を進めている。防災頭巾・ヘルメットを各教室に児童生徒職員分を用意し全校集会や行事の際に携行している。いまだに震災のトラウマがある児童生徒がおりサイレンや防災無線、小さな揺れ、震災にかかわる映像を怖がったり見たり聞いたりして不安定になったりすることがある。避難訓練が近づくと落ち着かなくなる児童生徒もいる。そのため訓練時は地震の効果音等は使わずに放送のみの訓練にしてい

る。

(2) 交通安全教室

地域の交通安全指導員を招いて実施している。模擬信号機を使用した横断歩道の渡り方を学習したり、市街地での信号機のある交差点の渡り方について学習している。

(3) 心肺蘇生法・AED講習会

教職員全員が参加し、講義1時間、実技2時間を通して、心肺蘇生法、AEDの操作を確認し、児童生徒の安全について学習した。

(4) 防犯教室・職員防犯訓練

不審者侵入時における校内体制の確認、初期対応の方法を学ぶことをねらいとして訓練を行っている。「不審者が学校に入ってきたら」という内容のプレゼンテーションで事後学習を行い、児童生徒の防犯への意識が高まった。職員防犯訓練では、警察署員に不審者役をお願いし、「さすまた」を使って実践的な訓練を実施した。

(5) 復興担い手育成支援事業

高等部が「卒業生との交流会」「マナーアップ講座」の事業を実施した。「卒業生との交流会」では、本校卒業生3名の仕事ぶりや生活の様子を紹介したDVDを視聴し、講演会も行った。卒業生が進路決定までの取り組み、現在の状況、思い等を聞いた。在校生が目標を見出し、進路に向けて前向きに取り組もうとする気持ちを持った。

「マナーアップ講座」では、遠野のホテルの担当講師による洋食のテーブルマナー指導、講話を受講した。洋食のマナーを知り、社会人として身に付けることとして意識するとともに、日頃の食事の仕方について気をつけようとする意識が高められた。

(6) 緊急捜索訓練

児童生徒が授業中に行方不明になったことを想定し、行方不明時マニュアルに沿って捜索訓練を実施した。

(7) ゴーヤ大作戦・花のプランター作り

高等部生徒と釜石高校全日制・定時制生徒が合同で「ゴーヤ大作戦」「花のプランター作り」に取り組んだ。高等部環境委員会が栽培し、「ゴーヤのグリーンカーテン」を釜石高校校舎周辺に設置した。活動を通して、釜石高校生徒との交流の機会を持つこ

とができた。

(8) 学校防災研修会

教職員対象に実施した。昨年度までは避難所開設時の利用計画を具体化・明確化する研修（ワークショップ形式）を実施してきたが、今年度は本校の危機管理の要点や備蓄災害用品等について確認し、防災に関する意識向上・共通理解を図った。また、消防署員を講師に依頼して消化器の使用法や負傷者の搬送方法を実技で学び、災害時の対応に備えることができた。

(9) 国総研担当者の学校訪問

国総研担当者が教育支援ガイドをまとめ全国の学校へ提示するために来校した。東日本大震災から今年度までの本校における復興教育・防災教育の取り組みを整理し、情報提供・説明をした。

(10) 希望郷いわて大会選手団激励会参加

「希望郷いわて大会全国障がい者スポーツ大会」の県選手団激励会に中学部が参加し、釜石市の郷土芸能である「虎舞」を披露した。練習には、虎舞保存会会長を招いて直接指導していただいた。激励会当日は、皇太子さまから直接お声をかけていただき満足した生徒の表情が印象的であった。

(11) 非常食体験

災害を想定した非常食体験を学部ごとに実施した。マジックライス、缶詰、ふりかけ、飲料水を食事体験した。生徒・職員ともに防災への意識の向上を図ることができた。

2 課題

東日本大震災から6年が経過し、現在は震災時に在籍していた職員が数名しかいない状況になった。いまだに仮設住宅で生活している児童生徒・職員もいる中でひとりひとりが日常生活でどのように防災意識を持ちながら学校生活・地域生活にとりくんでいくか、地域と学校とがどのように連携して防災教育に取り組んでいくかなどが課題として挙げられる。また、学校全体や学部ごとに行われる各訓練や非常食体験などにおいて、児童生徒個別のねらいや目標を定めて具体的な指導・支援計画を明記し、それに対する評価を行い、防災意識の向上へとつなげていきたい。これらのことを今後も継続して取り組むことが課題として考えられる。

II 取組の成果と課題

1 成果

東日本大震災の教訓をもとに、様々な自然災害に備えるために、本校の学校経営計画にある防災教育・復興教育に関する内容・ねらいを明確にするとともに、毎年実施している計画については必要に応じて見直しを図り、訓練、体験学習、研修会を推進してきた。それらを通して児童生徒は、災害に対する知識を身につけたり、危機意識や防災への関心の高まりが少しずつでもみられた。

防災教育・復興教育の充実を本校の重点に掲げ、地域に生きる教育として、地域資源を活用しながら様々な学習活動を児童生徒・各学部の実態に応じて取り組むことができた。また、「いわての復興教育」の教育的価値である「いきる」「そなえる」という部分で児童生徒・職員が考えて体験するよい機会となり成果につながったと考える。